

初等外国語教育法

11 章 評価の在り方，進め方

☞これまでの評価は学習改善に役立ったか？ 中間テストや期末テストを思い出してグループでディスカッションをしてください。

1 節 評価とは

☞指導と評価の一体化とは何？

学習評価 改善の基本的な方向性

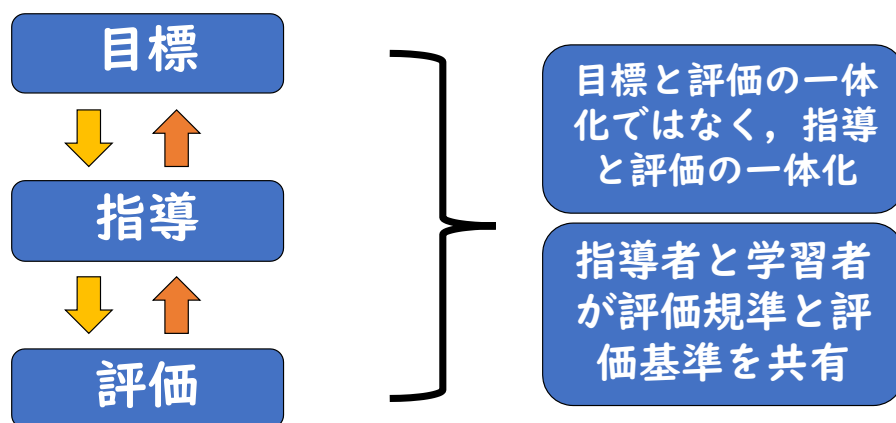
- ①児童生徒の**学習改善**につながるものにしていくこと。
- ②教師の**指導改善**につながるものにしていくこと。
- ③これまで慣行として行われてきたことでも、**必要性・妥当性**が認められないものは見直していく。

文部科学省（2019）「児童生徒の学習評価のあり方（報告）」

中高生の頃の評価（テスト）と聞いて思い出すこと・・・

- ・ 何が出るか分からず不安
- ・ 先生に訊いても教えてくれることはない
- ・ 何が出るのかを予想，そこで，テストの「山掛け」
- ・ 「山があたった！」「山が外れた」はテストの後の話題の中心
- ・ 席次が渡され，自分も頑張ったけれど，自分よりできる人がいると，いつも順位は下のほう
- ・ テストを返されても自分は何が悪かったのか，次はどう努力すればよいのかも分からない

「指導と評価の一体化」とは？



☞ 指導が学習者のためのものならば，評価も学習者のためのもの！



水泳の選手の例で考えてみると，どのようにしたら早く泳げるようになるのか，ということを科学的な知見を基に知識として学ぶこともあるでしょう。また，基礎体力を付けるために，スポーツジムでバーベルを持ち上げたり，ライニングマシーンで走ることもあるでしょう。しかし，それは全てプールで少しでも速く泳ぐことができるようになることを目指して行うものです。



今回の学習指導要領で求めている資質・能力も水泳選手がプールで泳ぐことを目標としているように，実生活で活用できることを目標としています。速く泳ぐとこができるかどうかは，どのぐらいの重さのバーベルを持ち上げることができるかどうかでは測ることができません。実際に泳ぐとことでしか測れません。また，練習の時はたえずタイムを計って練習の成果を確認したり修正したりします。タイムを計るのは試合の時だけではなく。練習の時も指導に活かすためにタイムを計っています。指導と評価の一体化はタイムを計って練習に活かすのに似ていると思います。

2 節 評価方法

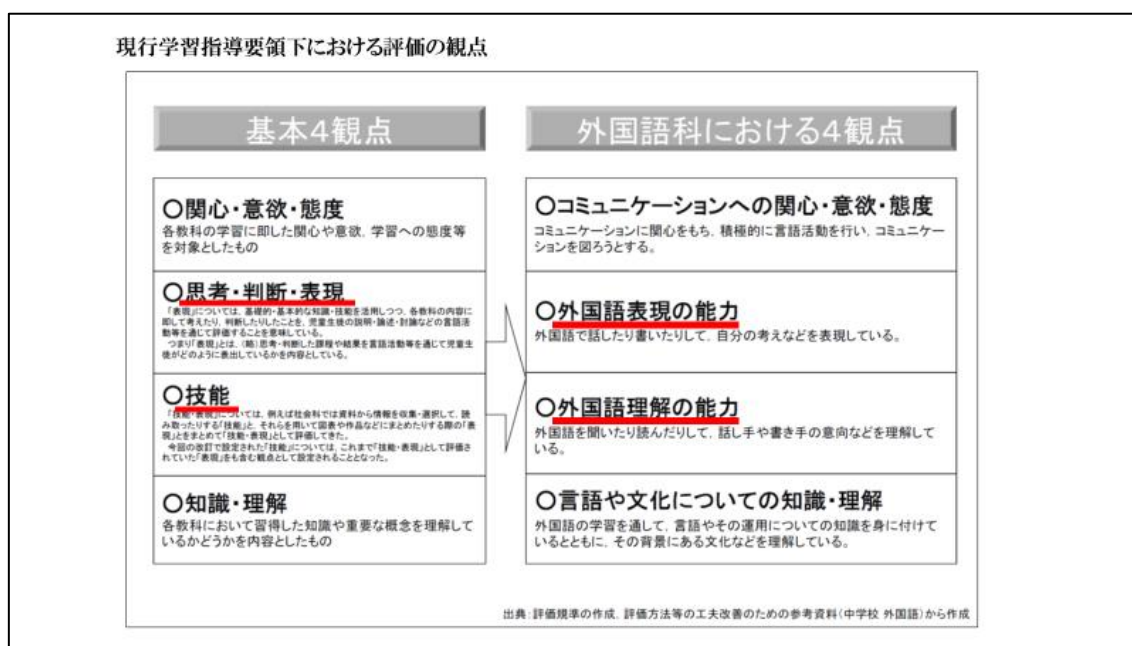
- ・ 筆記テスト
- ・ パフォーマンス評価
- ・ 自己評価や相互評価
- ・ ポートフォリオ評価

- ・児童の発表や行動の観察による評価
- ・CAN-DO 評価
- ・アンケート
- ・

3 節 評価の観点と望ましい評価のありかた

- ・現行（2020 年度以前）の評価
- ・新しい評価
- ・外国語活動と外国語科の評価基準

☞ 現行の評価と新しい評価はどこがどう違うのか？話し合ってみよう



現行学習指導要領下における評価の観点(4観点)

- 「関心・意欲・態度」・・・コミュニケーションへの関心・意欲・態度
 - 「思考・判断・表現」・・・
 - 「技能」・・・・・・・・・・・
 - 「知識・理解」・・・・・・・言語や文化についての知識・理解
- } 外国語表現・理解の能力

新学習指導要領下における評価の観点(3観点)

- 主体的に学習に取り組む態度
- 思考・判断・表現
- 知識・技能

現在は・・・

	4観点	評価
{	理解の能力	話すこと
		書くこと
	表現の能力	聞くこと
		読むこと
	関心・意欲・態度	コミュニケーションへの関心・意欲・態度
	知識・理解	言語や文化についての理解

5年生 年間評価計画イメージ（指導のための評価＝○ 記録に残す評価＝◎ パフォーマンス評価＝パ）

	Unit	1	2	3	4	パ	5	6	7	8	パ	総括
知識 技能	聞く	○	○	◎	◎		○	◎	○			
	話す（発）	○	○	◎	◎		○	○	◎			
	話す（や）	○	○	○	◎	◎		◎	◎		◎	
	読む				○		○	○	◎	◎		
	書く				○			○	◎	◎		
思考 判断 表現	聞く	○	○	◎	◎		○	○	◎	◎		
	話す（発）	○	○	◎	◎		○	○	◎	◎		
	話す（や）	○	○	○	◎	◎	○	○	○	◎	◎	
	読む						○	○	◎	◎		
	書く							○	◎	◎		
主体的 に学習 に取り組む 態度	聞く	○	○	○	◎		○	○	○	◎		
	話す（発）	○	○	○	◎		○	○	○	◎		
	話す（や）	○	○	○	◎	◎	○	○	○	◎	◎	
	読む						○	○	◎	◎		
	書く							○	◎	◎		

15スロットも評価することになる。何のために？

観点別学習状況の評価は，単元や題材において，学習者に身に付けさせたい資質・能力（学力）として目標設定した内容の実現を図るため，内容をいくつかの観点に分けて，一人一人の学習状況を丁寧に評価するためのものである。（高木展朗）

人間ドックににているかも・・・

学習評価は、序列を付けることではない。一人一人の子どもの資質・能力がいかにより育てられたかを、子ども一人一人に自覚させることが重要である。そのためには、どのような価値を資質・能力として身に付けるのかという目標を子どもに明示する必要がある。（高木）

人間ドックの結果を見て生活習慣を変える・・・

「指導と評価」は車の両輪です。評価観を見直すことが指導の改善に繋がるものと思います。

【評価の観点及びその趣旨】＜小学校 外国語＞

観点	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
趣旨	・外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違いに気付き、これらの知識を理解している。 ・読むこと、書くことに慣れ親しんでいる。 ・外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどの知識を、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けている。	・コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合っている。 ・コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、音声で十分慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合っている。	外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとしている。 次にもっと詳しくみていきます。

文部科学省通知（2019年3月29日）

指導と評価の一体化 / 評価観の変更

【知識及び技能】における「(1)英語の特徴や決まりに関する事項」に記されている「音声」の特徴を捉えて話すことについては、**それ自体を観点別評価の規準とはしないが**、ネイティブ・スピーカーや英語が堪能な地域人材を活用したり、デジタル教材等を活用したりして**適切に指導を行う。**（赤字筆者）

「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」 国立教育政策研究所，2020

	学習指導要領（平成29年告示）小学校高学年外国語，中学校外国語の「知識及び技能」の目標
小学校	（1）外国語の音声や文字，語彙，表現， 文構造 ，言語の働きなどについて，日本語と外国語との違いに気付き，これらの知識を理解するとともに，読むこと，書くことに慣れ親しみ，聞くこと，読むこと，話すこと，書くことによる実際のコミュニケーションにおいて，活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。
中学校	（1）外国語の音声や語彙，表現， 文法 ，言語の働きなどを理解するとともに，これらの知識を，聞くこと，読むこと，話すこと，書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けるようにする。

子ども：I want new soccer ball.

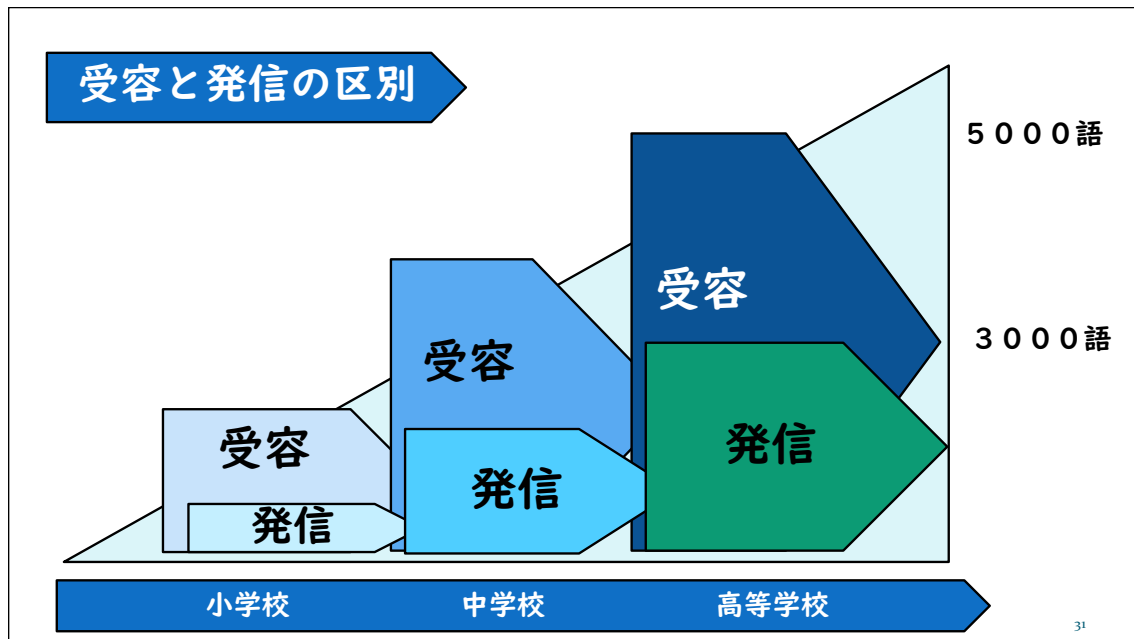
👉 冠詞の a が抜けていますが評価はしません。

母親：Oh, you want a new soccer ball.

👉 でも，a を入れて指導はします。

絵本をとばしながら読む親
はいません。（中村典生先
生 長崎大学副学長）





4 節 さまざまな評価方法と進め方

1. 児童の発表や行動の観察による評価
2. 自己評価
3. パフォーマンス評価

☞ パフォーマンス評価とはどんなものか？

① 態度面

② スキル面

4. ポートフォリオ評価

☞ ポートフォリオ評価とは何？

5. その他の評価方法

5 節 評価の活かし方と留意点



小学校高学年の教科としての外国語教育における「観点別学習状況の評価」についても、中・高等学校の外国語科と同様に「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の3観点により行う必要がある。その際、必要な資質・能力を育成するための学びの過程を通じて、**筆記テストのみならず、インタビュー（面接）、スピーチ、簡単な語句や文を書くこと等のパフォーマンス評価や活動の観察等、多様な評価方法から、その場面における児童の学習状況を的確に評価できる方法を選択して評価することが重要である。（中教審答申）**



複数の単元をまたいだ「やり取り」の評価



「やり取りの評価」の2つのタイプ



(1) インタビューのような教師と生徒の対話型



(2) ロールプレイのような生徒間の対話型

(1) インタビューのような教師と生徒との対話型

【メリット】

- ①教師が対話を掌握しやすい。
- ②受験者への質問を標準化することができる。
- ③公平感を与えることができる

【デメリット】

- ①受験者は質問に答えることが多く、発話のタイプが限定されやすい。
- ②教師が相手だと緊張などから生徒はスピーキングの能力を発揮しづらい。
- ③対話と評価を同時に行うため教師の負荷が大きい

<深澤「英語教育」2018年1月号>

(2) ロールプレイのような生徒間の対話

【メリット】

- ①対話者がお互いに会話を作り上げていく2方向の相互作用的関係がある。
- ②対話者の関係が対等であるため話しやすい。
- ③自然な発話を引き出しやすい。
- ④教師は評価に集中できる。

【デメリット】

- ①対話相手によってパフォーマンスに影響を受けやすい。
- ②教師との対話テストに比べてテストを標準化することが難しい。
- ③教師は受験者2人を同時に評価しなければならない。

< 深澤「英語教育」2018年1月号 >